

第2学年 道徳学習指導案

日 時 平成16年11月10日(水) 5校時
学 級 2年A組 男12名 女10名 計22名
授業者 柴田 敬恵(T1) 佐藤 哲也(T2)

1. 主 題 名 真の友情
2. 資 料 名 『勝利への坂道』
3. 内容項目 2 - 「友情」
4. 主題設定の理由

(1) 価値について

中学生という世代は、友達という存在に大きく影響を受ける時期である。同時に、自己中心的な考えによって相手を傷つけてしまうことも多く、自分と考えが一致するもののみを友達とする傾向も見られる。また、友達との関係を気まずいものにしないために、忠告や助言なども全くせずうわべだけのつき合い方をすることも少なくない。相手の立場を思いやり、時には相手のために苦言を呈することが真の友情につながっていくということに気づかせ、深く考えるきっかけとしたい。

(2) 資料について

本資料は、車椅子でマラソン大会に出場する友達を介助する「ぼく」の葛藤を描いた「ぼくは伴走者」という資料をもとに作ったものである。着々とトレーニングを積み、本番を迎えた当日、順調に走っていたひろしであったが、最後の坂で力尽き、伴走者である友人つとむに「押してくれ」と頼む。最後まで自分の力で頑張ってもらいたいと願う、押さなかったつとむ。展開の場面でそれぞれの立場が明確にできるような資料を準備し、2人の心情をより深く考えさせたい。

(3) 生徒について

本学級の生徒は元気が良く、授業においても活発に発言し、自分の考えを主張することができる。
4月実施の道徳性検査HUMANによる道徳性SSの学級平均は49.4であり、全国水準にほぼ等しい。しかし、本主題に関わる「2 主として他の人とのかわりに関すること 友情」では、A19%、B24%、C57%(全国A34%、B40%、C25%)と、大きく落ち込んでいる。「友情」の大切さは理解しながらも、相手の気持ちを考えない発言をすることが少なくない。また、同じ学級内でも、自分に直接関わる数名のみに話し、その他には関心を示さない者もいる。しかし、様々な活動を行う中で、自分とは違う考えを持った級友と意見を交わすうちに、他を尊重していこうという心が育ちつつある。本授業において、相手の気持ちをより主体的に理解していこうという姿勢を養いたい。

(4) 指導にあたって

本授業では、展開部分の充実を図るために、75分授業とする。まず、与えた資料をもとに生徒自らが、ひろしとつとむ、いずれかの視点で考える2通りの学習から選択させる。ひろしとつとむの立場や心情をじっくりと考えさせるため、展開場面の前半は教室を分け、それぞれの授業者が指導する。後半部分では再び一つの教室に戻り、2つの視点から考えた意見を交わすことにより、相手の立場を思いやり、真の友情を考えることにつなげたい。

5. 本時の指導

(1) ねらい

相手の立場を思いやり、時には、きびしく接することが真の友情につながっていくことに気づかせ、望ましい友情関係を築いていこうという意欲を育てる。

(2) 展開案

段階	学習活動と主な発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点																						
導入 15分	1. 資料1を読む 2. あらすじを確認する 3. ひろしとつとむのどちらの気持ちから考えを深めていくかを決める	・ ひろしに共感する生徒が多い	・ T1が進める ・ ひろしが勝ちにこだわっている点を中心に板書する ・ 自分の気持ちに近いほうを選択させる																						
教室を別に(移動)して、それぞれの立場で考えを深める																									
展開	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; text-align: center;">ひろし</td> <td style="width: 50%; text-align: center;">つとむ</td> </tr> <tr> <td>4. 「押して」と言ったことをどう思うか</td> <td>4. 押さなかったことをどう思うか</td> </tr> <tr> <td>5. 資料2を読む</td> <td>5. 資料3を読む</td> </tr> <tr> <td>6. マラソンは、ひろしにとってどんなものか</td> <td>6. マラソンに取り組むひろしをどう思っていたか</td> </tr> <tr> <td>7. どうしてひろしは、「押して」と言ったのだろうか</td> <td>7. つとむが押さなかったのはどうしてだろうか</td> </tr> <tr> <td>8. レース後の気持ちを考える</td> <td>8. レース後の気持ちを考える</td> </tr> </table>	ひろし	つとむ	4. 「押して」と言ったことをどう思うか	4. 押さなかったことをどう思うか	5. 資料2を読む	5. 資料3を読む	6. マラソンは、ひろしにとってどんなものか	6. マラソンに取り組むひろしをどう思っていたか	7. どうしてひろしは、「押して」と言ったのだろうか	7. つとむが押さなかったのはどうしてだろうか	8. レース後の気持ちを考える	8. レース後の気持ちを考える	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; text-align: center;">ひろし</td> <td style="width: 50%; text-align: center;">つとむ</td> </tr> <tr> <td>・ 勝ちたいのだから仕方ない</td> <td>・ 頑張してほしいと思っているから当然だ</td> </tr> <tr> <td>・ 自信が持てるようになった ・ 頑張るきっかけになった</td> <td>・ 頑張っているのでも助け合いたい ・ 積極的になったひろしの変化をよるこんでいる</td> </tr> <tr> <td>・ どうしても勝ちた ・ 親を喜ばせたい ・ 期待されている</td> <td>・ 今まで頑張ってきたのだから、できる</td> </tr> <tr> <td>・ つとむなら、押ししてくれると思ったのに</td> <td>・ 自分の力で走り通さなければひろしのためにならない</td> </tr> </table>	ひろし	つとむ	・ 勝ちたいのだから仕方ない	・ 頑張してほしいと思っているから当然だ	・ 自信が持てるようになった ・ 頑張るきっかけになった	・ 頑張っているのでも助け合いたい ・ 積極的になったひろしの変化をよるこんでいる	・ どうしても勝ちた ・ 親を喜ばせたい ・ 期待されている	・ 今まで頑張ってきたのだから、できる	・ つとむなら、押ししてくれると思ったのに	・ 自分の力で走り通さなければひろしのためにならない	<ul style="list-style-type: none"> ・ T1がつとむ側、T2がひろし側に立ち、進める ・ ひろしが勝ちにこだわった点を中心に考えを深めさせる ・ プリントに記入した後、発表し合い、まとめる
	ひろし	つとむ																							
	4. 「押して」と言ったことをどう思うか	4. 押さなかったことをどう思うか																							
	5. 資料2を読む	5. 資料3を読む																							
6. マラソンは、ひろしにとってどんなものか	6. マラソンに取り組むひろしをどう思っていたか																								
7. どうしてひろしは、「押して」と言ったのだろうか	7. つとむが押さなかったのはどうしてだろうか																								
8. レース後の気持ちを考える	8. レース後の気持ちを考える																								
ひろし	つとむ																								
・ 勝ちたいのだから仕方ない	・ 頑張してほしいと思っているから当然だ																								
・ 自信が持てるようになった ・ 頑張るきっかけになった	・ 頑張っているのでも助け合いたい ・ 積極的になったひろしの変化をよるこんでいる																								
・ どうしても勝ちた ・ 親を喜ばせたい ・ 期待されている	・ 今まで頑張ってきたのだから、できる																								
・ つとむなら、押ししてくれると思ったのに	・ 自分の力で走り通さなければひろしのためにならない																								
1つの教室に集まり、お互いの立場・気持ちを考える																									
45分	9. レース後の互いの気持ちを考える	・ ひろし側、つとむ側の順で発表する	・ グループごとの座席にする ・ 反論を引き出しながら、思いやりや厳しさだけでなく、互いに高め合いたいという気持ちがあることに気づかせたい																						
終末 15分	10. 相手に手紙を書く	・ 互いの気持ちを理解したうえで、自分の考えをまとめる ・ 発表する	・ 友情のあり方にふれるまとめにしたい ・ これからの自分の行動への意欲にふれさせたい																						

(3) 評価

相手の立場を思いやり、時には、きびしく接することが真の友情につながっていくことに気づき、望ましい友情関係を築いていこうという気持ちを持つことができたか。

勝利への坂道

ひろしは、小さい頃から足が不自由なせいで、ずっと車いすでの生活を送っている。つとむはひろしの小さい頃からの友達で、内気なひろしはいつもつとむだけを頼りにしていた。しかし、二年前、ひろしは突然、県内最大のマラソン大会に出たいと言いだした。そのマラソン大会には車いすの部があった。「ぼく、自分の力で走りたいんだ。」ひろしの目を見てつとむは彼の伴走者を引き受けた。伴走者とは、車いすのレースで選手の安全を守るために一緒に走る人である。

車いすの部の距離は五キロメートル、それまでほとんど運動をしたことがなかったひろしにとつては大変な距離で、その伴走をするつとむにとつても容易なものではない。二人は1ヶ月以上の練習をこなした。その間、ひろしもつとむも幾度となくめげそうになったが、その度にひろしの両親や先生に励まされてがんばり抜くことが出来た。

大会当日、練習の成果があらわれたのが目標であった完走どころか、中学生の部で参加五十五人中十位の好成績をあげた。ひろしの両親や先生が驚き、喜んだのはもちろんだったが、誰よりも感動していたのはひろしとつとむ自身であった。内気だったひろしはこれをきっかけに何事にも意欲的に取り組むようになった。ひろしはこれをきっかけに何事

昨年このマラソン大会に二人で参加した。目標は三位以内に入賞し、表彰台にあがることであつた。この目標は前年の大会が終わった直後に二人でたてたもので、そのため、つとむとひろしはそれまで以上にたっかい練習に取り組んだ。結果は中学生の部二位で、しかも、ゴール前の坂道まではトップを守つていらつた。つとむは目標が達成できた充実感を感じていたが、ひろしは最後に抜かれた悔しさで全身をふるわせていた。それをを見て、つとむは「最後に抜かれた表彰台に立てるように明日からでも練習しよう。」とひろしに声をかけ、ひろしは目に涙をいっぱい浮かべながらうなずいた。

その言葉通り、二人は次の日から練習に取り組んだ。特に、ゴール近くの坂道で抜かれた反省から坂道での練習に打ち込んだ。特に、ゴール近くの部ではダントツの優勝候補と噂されるまでになつていた。大会が近づくとつとむは「絶対勝たなきゃ。」と

「絶対勝たなきゃ。」が口癖となつていた。二人は八ードな練習のおかげで順調にレースを進め、残り一キロメートルの地点で二位を大きく離し、一位をキープしていた。しかし、昨年抜かれた坂道に達したあたりで急にペースが落ちた。知らず知らずのうちこのままでは、また、昨年同様この坂道で抜かれてしまふとつとむが一瞬不安を感じたその時だつた。

つとむが「押してくれ。」とつとむが「瞬間不安を感じたその時だつた。」とひろしが言った。この坂道では応援の人影が全く見え、後ろから追ってくる選手達からも二人は見えない。つとむが悩んでいるとまたひ

「ろしが、頼む、つとむ押ししてくれ。」
と先程よりも強い口調で言ってきた。
しかし、つとむはひろしの言うとおりにしなかった。
二人は坂道を登りきる前に抜かれ、今年も二位であった。
抜かれた直後からひろしは泣いていた。そのためか、

つとむの前日の日記

いよいよ明日はひろしのマラソン大会だ。ひろしにとっては中学最後の大会でもある。

小学時代まで、全てに消極的で、いつもぼくの後を追っかけてくるだけのひ弱なひろしが今回は優勝候補にもあがっている。本当にひろしはよく頑張った。毎日どんなことがあるかと放課後のトレーニングを欠かさずやったのはすごい。はじめのころは何回もくじけそうになっていたのに、昨年の大会が終わってからは弱音一つ吐かなかった。

今日、母と買い物に行って、ひろしの欲しがっていた手袋を買った。激しい練習のために、すっかりぼろぼろになっていた。レースが終わったら渡すつもりだ。ひろしが優勝したら喜ぶだろうな。

でも、このごろのひろしは少し心配だ。『勝ちたいんだ』って言葉があまりにも多い気がする。勝って欲しいし、勝たせてあげたい。でも、勝つことだけがすべてではないような気もする。うまく言えないけれど・・・

とにかく、明日はぼくも頑張らなきゃ。

ひろしの前日の日記

いよいよ明日は中学最後のマラソン大会だ。去年の大会ではもう少しで優勝だったのに、あの坂道で抜かれ、本当に悔しかった。だから、ぼくはぼくなり、一杯の努力をしてきた。学校でのトレーニングはもちろん、あの坂道で、もう抜かれないようにするため、一人で腕力を鍛える朝練習を毎日した。テスト勉強をして遅くまで起きていた次の日だつてやった。もうあんな悔しい思いはしたくないから。

昨年の大会の日、帰宅すると母は何も言わず笑顔でむかえてくれた。次の日から、母は疲れて帰ってくるぼくに毎日マッサージをしてくれた。また、「今日のタイムはどうだった？」と聞いて来ない日がないくらい、ぼくに声をかけてきた。頑張っているぼくを心から応援してくれているようにだけ・・・。

つとむも今日の練習では緊張していたな。思えばつとむがいたから今までやってこられた。自分のクラブがあるのに、毎日、放課後の練習にときあつてくれて。ひ弱なぼくをいつも見守ってくれた。

でも、正直ぼくも緊張している。昨年二位だったせい、か優勝候補だった。昼休み、校長室に呼ばれて校長先生はじめたくさんの人から励まされた。もう優勝したかのように言われ、何か変な気分だった。近所の人も、「今年こそ優勝だぞ。」だって。頑張らなくちゃ。